

平成 28 年 3 月 31 日

4) 平成 27 年度「教員による授業参観」の実施について（報告）

教員による相互の授業参観は、教育学部がスタートした平成 26 年度より実施している。その目的は、本学部専任教員による教養・専門等の授業が、授業参観のアンケート項目としての「動機づけ、学生とのコミュニケーション、授業方法など」の面において適切に行われていることを教育学部の同僚教員の目を通して確認・検証すること目的としている。これにより、FD 報告書の「はじめに」に示した教育学部の授業改善における PDCA サイクルの一つを機能させることが可能となるものと考えている。

【前期における授業参観について】

- 1) 実施状況：前期においては、教育学部に本年度新たに採用された 3 人の教員の 1 年生と 2 年生を対象にした授業科目について授業参観を実施した。
- 2) 授業参観者：教育学部教員（延人数）8 人
- 3) 授業参観期間：平成 27 年 6 月 15 日～7 月 24 日（講義修了）まで
- 4) 授業参観対象の講義：情報処理Ⅱ（2 年生）、教育と社会（1 年生）、保育内容指導法（造形表現）（2 年生）
- 5) 評価項目

授業参観の評価項目（別紙参照）は、動機づけ 10 項目、学生とのコミュニケーション 1 項目、講師について 2 項目、技法 8 項目についてアンケート形式とし、それぞれの項目について「良くあてはまる：4 点」～「全くあてはまらない：1 点」及び「該当しない」と思われる点に「○」にマークする。さらに、これらのアンケート項目についてそれぞれ評価点及びその合計を総合評価点とする。また、記述欄を設け、参考となる点や工夫している点等について具体的に指摘する他、自分の授業等で取り入れたいアイデア等あれば記述するようになっている。

授業参観を実施し、評価を整理した結果、総合評価点（満点：4 点）は、情報処理Ⅱ（3.21 点）、教育と社会（3.36 点）、保育内容指導法造形表現（3.42 点）であった。これらの授業では、同僚教員の目から見て大学レベルの授業として、「動機づけ、学生とのコミュニケーション、授業方法など」の評価項目でいずれも適切であることが指摘された。

また、コメント欄には、それぞれの授業科目について、授業参観者から、例えば、「情報

処理Ⅱ」では著作権や個人情報保護について分かりやすく説明されているとコメントされ、「教育と社会」では、丁寧で質の高い授業内容を分かりやすく説明している、また振返りを多用し学生への知識の定着を図っているとコメントされていた。また、「保育内容指導法造形表現」では、授業について前半は理論的なことを説明し、後半には実技的なことを行っており、理論と実践を同時に教授することにより当該科目で学んだ知識の定着をより効果的に行う試みとして高く評価されるとコメントされていた。

平成 26 年度学部スタート時から「教員相互の授業参観」を実施しているが、本学部の専任教員が担当する授業では、教員養成課程学部として、学生に必要な知識や情報を理解させ、定着を図る努力が払われていることが確認された。

【後期における授業参観について】

- 1) 実施状況：後期では、教育学部の専任教員で後期に担当する 1 年生及び 2 年生を対象とした授業科目について授業参観を実施した。
- 2) 授業参観者：教育学部教員（延人数）16 人
- 3) 授業参観期間：平成 27 年 12 月 7 日以降～平成 28 年 2 月 4 日（後期授業終了）まで
- 4) 授業参観対象の講義：後期に開講された専任教員が担当する授業科目：1 年生対象 4 科目（文学、数学と生活、子どもと食育、教職概論）、2 年生対象 5 科目（図画工作科教育法、ピアノ・声楽Ⅱ、子どもの音楽活動、特別活動の指導法、保育内容指導法人間関係）
- 5) 評価項目（別紙参照）

前期と同様のアンケート形式で実施した（動機づけ 10 項目、学生とのコミュニケーション 1 項目、講師について 2 項目、技法 8 項目について、それぞれ「良くあてはまる：4 点」～「全くあてはまらない：1 点」及び「該当しない」と思われる点に「○」にマークし、評価点を算出した。また、記述欄を設け、参考となる点・工夫している点等について具体的に指摘する他、自分の授業等で取り入れたいアイデア等あれば記述）。

後期における授業参観では、専任教員が担当する授業科目を対象に実施した。

その結果、1 年生を対象とした 4 科目の授業参観の総合評価点（満点：4 点）は、教職概論（2.67 点）、数学と生活（3.89 点）、子どもと食育（3.56 点）、文学（3.94 点）であった。教職概論は、悪い評価となった。授業参観者のコメントによると、実施された授業が淡々と説明するいわゆる一方通行の授業形式となっていたようである。また、学生による授業評価においても同様に評価は芳しいものではなく、コメント欄には学生は一方通行的と感じ、ま

た授業スピードが同時速すぎるために理解が追いつかないと感じているようである。しかし、教職概論ではシラバスを見ると取り扱うべき内容は非常に多く、ある程度のスピードで授業せざるを得ない面がある。また、このような教職に関する授業が1年生の学生にとって初めての教育内容であり、如何に理解させるか、担当教員は授業点検シートにおいて次学期には十分に配慮し、分かりやすいよる授業を実施すると述べていることから、次学期における授業改善を期待したい。

その他の授業において、特に教育学部の同僚教員である授業参観者の目から見て、参考となるとアクティブラーニングについて、指摘・コメントされた参考例をいくつか挙げる。

- ・「文学」では、学生が司会者となり、一人の学生に詩を朗読させ、その後お互いに感想を述べ合い、学生の詩に対する理解を深めるための授業が導入されていた。
- ・「数学と生活」では、誰でもが興味を持つ身近な大腸がんや胃がんの発症データを利用して、数学の計算を組み立て、さらに考える時間を十分与えて解答させ・理解を深める授業方法を展開していた。
- ・「子どもと食育」では、十分に準備されたスライド資料を参照しながら、説得力のある授業を進め、不明な点等あればすぐにタブレット PC を活用して情報を検索・理解させる授業を展開させていた。また、常に学生に振り返りを促がし、今説明しているスライドの内容につなげるなど、授業目標を意識した授業展開を図っていた。

2年生を対象した5科目の評価総合点(4点満点)は、図画工作科教育法(3.89点)、ピアノ・声楽Ⅱ(3.27点・3.32点)、子どもの音楽活動(3.50点)、特別活動の指導法(3.71点)、保育内容指導法人間関係(3.78点)であった。

いずれの科目も高得点を得ており、特に問題となる授業科目は見当たらない。特に、授業参観者の目から見て、いずれも丁寧な授業が実践されており、参考となると指摘・コメントされた事例をいくつか挙げる。

- ・図画工作科教育法では、学修指導要領の要点を押さえた教科教育法の基礎・基本の定着が図られていた。個別指導の中で専門的な技法について適切なアドバイスがされ、学習意欲を高める工夫がされていた。
- ・ピアノ・声楽Ⅱでは、ピアノの初心者が多い中で、個別に根気強い指導、指の運び指導、学生に指揮と伴奏をさせて理解を深めさせる努力が払われ、また課題曲を必ず達成させようとする授業が展開されていた。

- ・子どもの音楽活動では、学生のレベルに合わせた発声練習・ピアノの弾き方と発声の変化の指導が行われ、合唱では学生に指揮や伴奏をさせ、充実した演奏練習が行われ、また授業前準備として楽譜・資料を用意している点、歌唱指導法が明確で、また協働的な授業作りが行われていた。
- ・特別活動の指導法では、実際の小学校等で実践されている委員会活動などをビデオで説明・理解させるための工夫がされており、また模擬授業も導入されており、学生に理解させるための努力が十分に払われていた。
- ・保育内容指導法人間関係では、振り返りによる前回の授業の確認、コミュニケーションカードを利用した感想文に対する教員のコメントやグループ授業を活用して班ごとにスライドを利用して発表させて、さらに質疑応答などを行い、授業内容を理解させる工夫が払われていた。また、ミニツツペーパーを活用したり、グループ学習を行うの中で適宜教員が補足説明を行い、より深い理解を促す授業が実践されていた。

【平成 27 年度前期・後期における授業参観評価に関する総括】

平成 27 年度前期及び後期において、開講された授業において、教育学部専任教員は、①授業のためのしっかりした事前資料・準備が行い、②丁寧でわかりやすい授業を実施し、③さらに、学生に教員養成課程として必要な知識の理解・定着を図るために、授業方法として、振り返り、ミニツツペーパー、グループ学習や模擬授業などのアクティブラーニングを採用していることが確認された。また、音楽、図画工作や体育などの実技系授業科目において、初心者からかなりの技能をもつ学生が混在する中で十分な配慮がされた授業が展開されており、特に初心者の知識・技能を向上させるために「熱心な努力と的確な授業方法」が採用され、実績をあげていることが確認された。

以上のように、平成 26 年度及び 27 年度の 2 年間にわたる教育学部教員による授業参観を実施して、適切な授業が展開されており、ほぼ満足すべき教育が行われていることが確認された。

以上